

平成22年度企画事業

免許状更新講習

理科や生活科、総合的な学習の時間の指導に生きる、知識や技能を学ぶことができました。また、野外炊飯やなかま作りなどに役立つ知識や指導技術も身につけることができました。

1. 事業実施までの経緯

平成19年6月の改正教育職員免許法の成立により、平成21年4月1日から教員免許更新制が導入されることになった。教員免許更新制は、その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指すものである。

今日の子どもの現状として、基礎的な体力の不足や低下、基本的生活習慣や生活リズムの乱れ、意欲を持ってないことや希薄な対人関係などが指摘されるとともに、いじめ、不登校、引きこもり、学級崩壊などの問題が顕著になっている。こうした問題の原因として、子どもへの保護者の関与の低さや地域の大人の関わりが少ないこと、そして、自然とのふれあいや仲間との交流の少なさといった直接体験の不足があげられる。

子どもたちに社会性や豊かな人間性をはぐくむため、その発達段階に応じた体験活動の充実を図るためには、教員自らの体験を豊かにするとともに、教員が体験活動に関する基礎的な知識技能を身につけることが求められる。そこで、当所での実施にあたっては「教員が『①実際に体験』し、『②子どもたちの指導方法を学び』、併せて『③学級経営や問題行動対策等への活用方策についても考える』講習会を実施することとする。」ということに留意し、本事業を実施した。

2. ね ら い

地域の自然環境を生かした「生活科」、「理科」、防災や環境をテーマにした「総合的な学習の時間」を指導するための必要な知識・技能を身に付ける。また、自然体験活動の指導技術を身に付け、体験活動の重要性について体感すると共に、学級づくりに役立つ体験学習を活用した指導法について学ぶ。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

4. 期 日 平成22年8月19日(木)・20日(金)

5. 場 所 国立大洲青少年交流の家他

6. 参加人数 19日…32名 20日…36名 (募集人数各30名)

7. 講 師 家山 博史 氏 (愛媛大学教育学部 教授)
高橋 治郎 氏 (愛媛大学教育学部 教授)
佐野 栄 氏 (愛媛大学教育学部 教授)
国立大洲青少年交流の家 次長 主任企画指導専門職 企画指導専門職

8. 日 程

8/19 (木)	8:45	9:00	12:00	13:00	14:00	14:15	15:45	16:00	17:00
	受 付	ガイ ダ ンス	実習 「川原で観察」 2.5h	昼 食	講義 「地学分野」 1.0h	休 憩	実習・講義 「生物分野」 1.5h	休 憩	試 験

8/20 (金)	8:45	9:15	(休憩) 13:00		14:40	15:10	16:10
	受 付	ガイ ダ ンス	実習 「体験活動の指導法Ⅰ」 (野外炊飯) 3.5h		実習・講義 「体験活動の指導法Ⅱ」 1.5h	休 憩	試 験

9. 活動内容

8月19日(木)

【実習】川原で観察

講師 愛媛大学教育学部教授 家山 博史 氏
愛媛大学教育学部教授 高橋 治郎 氏
愛媛大学教育学部教授 佐野 栄 氏

大洲大橋下の川原で、水生生物、岩石や地形の観察などを行った。環境影響評価の手段としての生物指標である水生生物の調査法では、枠内の生物を採取する方法や水生生物についての説明があった。受講者は、石をはぐったり、砂利をかき混ぜて下流側の網で受けたりして、いろいろな種類の水生生物を採取し観察することができた。また、100円ショップなどで売られている身近な道具の活用方法などもわかった。

岩石の採取では、川原にある石の中から代表的な6種類の岩石を採取した。なかなか見つからない岩石もあったが、受講者の皆さんは熱心に探し、幸運なことに受講者の内の何名かは、すべての岩石を探し出すことができた。見つけた石灰石に塩酸をかけ、二酸化炭素の発生を確認し、「2億年以上前に取り込まれた二酸化炭素が発生している。」との解説を聞き、タイムカプセルを開けたような感じがした。

バックテストによる水質検査では、川の水の他、米のとぎ汁や液肥を薄めたものについてpH、COD、 PO_4 の3項目の検査を行った。各班に分かれたあと、標準色と照らし合わせながら、協力して検査することができた。



【講義】地学分野

講師 愛媛大学教育学部教授 高橋 治郎 氏
愛媛大学教育学部教授 佐野 栄 氏

地学分野のまとめでは、「川原の石から大地のつくりを探る」と題して、肱川の特長や、川原の石の特徴、四国の地質分布などの説明があった。4つのプレートがぶつかり合う中で、海洋プレートのもぐり込みによる海溝堆積物の付加や海山の付加によって、まった



く違う場所に堆積してできた岩石が同じ肱川の川原で見つかることがわかり、地球のダイナミックな動きを実感することができた。また、水質調査のまとめでは、各班の検査結果をホワイトボードに書き出し、それぞれの調査項目について考察することができた。



【実習・講義】生物分野

講師 愛媛大学教育学部教授 家山 博史 氏

水生生物による環境調査の利点や欠点についての説明の後、水生生物の同定作業を行った。実体顕微鏡をのぞき、資料と見比べながら名前を調べていった。よく似た姿に苦労しながらも、協力して同定作業を行うことができた。



8月19日(木)

【実習】体験活動の指導法Ⅰ

講師 主任企画指導専門職

はじめに行ったリスクマネジメント実習では、活動が行われる場所を下見し、危険箇所の確認と、活動中に起こりうる事故を書き出し、「リスクの発見・把握」を行った。その後、各班で書き出した事例について、確率と危険度で分類し「リスクの評価・分析」を行った。そして、防ぐためにどうするか、発生したらどうするかなど「リスクの対処・処理」について話し合った。



野外炊飯実習では、効率的な火のおこし方、おいしいご飯を炊くための時間配分、吸水させることでさらにおいしいご飯になること、水の量を変えるとどんな炊きあがりになるか、片付けの時間を短縮するための知恵などについて、実習を通して実際に体験した。初対面ながらお互い役割分担をし、手際よく炊事ができた。わかっていることを再確認したり、新たな発見をしたりと有意義な時間を過ごすことができた。各班とも、おいしくできあがり、満足した様子であった。



【実習・講義】体験活動の指導法Ⅱ

講師 次長・企画指導専門職

テキスト「学校で自然体験をすすめるために」を中心に学びの過程における体験活動の重要性についての講義があった。資料「子どもの頃の体験は、その後の人生に影響する」では、具体的な調査事例を元に小さい頃における体験活動の重要性を再認識することができた。また、「コミュニケーション能力の向上」などの体験活動の効果と教育的意義について学ぶことができた。



講義の後、「グループワークゲームを通して体験学習法を学ぶ」と題して、実際に体を動かしての実習を行った。

実践例：拍手ゲーム、ジッピーが言いました、7-11、相性チェック、スタンドアップ、仲間集まり、ネームトス、キャッチ、ヘリウムフラフープ、フープ知恵の輪（宿題）など

単なる楽しい体験だけに終わらせず、体験を学びに変えるための体験学習法の循環過程について学んでから、グループワークゲームを実際に体験した。初対面で緊張した雰囲気から、プログラムを一つ一つこなしていく内に、緊張もほぐれ、笑顔が徐々に増えていった。ハイタッチから握手、両手を合わせてと少しずつ身体接触を増やし、お互いの協力や信頼関係を築くプログラムをこなしていった。適宜「ふりかえり」を入れることでその重要性を認識することができた。また、スタンドアップでうまく立ち上がったときや、ついつい上がってしまうフラフープを協力して下げることができたときには歓声があがり、大きな達成感も味わうことができた。



10. 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

* 満足：72.5% * やや満足：27.5% * やや不満：0.0% * 不満：0.0%

- 川原の石の配列で水の流れている方向がわかったり、安全に川を渡るにはどこを渡ればよいかなど、興味深いおはなしがたくさん聞けて参考になりました。野外活動は危険なことも多いですが、やはり実際に目にする講義で聴くだけとは違い、印象に残るものだなと実感しました。
- 生物を採るために川に入ったとき、場所によって水温が変化する、流速が変化するといった内容は実際に体験しないとわからないことです。自分で体験して掴み取った内容は、長い間覚えていられると思います。体験を伴った、長い間覚えてもらえるような授業をしていきたいです。
- リスクの発見・把握をしっかりしていくことが大切。また、把握したことをどのように対処していくかも考えておく必要がある。みんなで一つのことをするという活動は、人間関係を向上させるのにとっても有効であるということがわかった。
- 体験したことからの「気づき」をふりかえることで、学ぶことができるという話を聞いて、小学校生活科にも同じことが言えると思った。「気づき」に気づかせることも必要で、そうすることで「ふりかえり」や「わかちあい」がより効果的に行われると思う。まずは体験。体験が知識となり、生きる力、実践する力になると思った。

11. 成果と課題

愛媛大学の教授陣による地学と生物の実習・講義は、地域素材を生かした指導内容で、学校現場での理科や生活科ですぐに実践できるものであり、嬉々とした表情で実習に取り組む様子からも受講者の満足度が伺えた。また、野外炊飯の基礎技術や学級づくりに役立つ体験学習法など、今後の指導に役立つ内容を提供できたと考えている。2日間とも、体を動かして指導技術を身につけたいという受講者の希望に合致し、ふりかえり等の感想にも満足した、よかったという記述が多く見られた。

昨年度は人数不足で実施できなかったが、今年度は、愛媛大学と連携し、広報活動をはやくしたことで募集人数を超える応募があった。しかし、締切日を愛媛大学の締切日後に設定していたため、参加者に不安を与えた（抽選で落選した場合の受け皿がない）のも事実であり、締切日の設定を見直す必要があると感じた。また、カヌーやクライミングウォールなど大洲青少年交流の家ならではのプログラムを活用した講習内容も検討し、ここでしかできない免許状更新講習にしていきたい。